

# *Alice's Adventures in Wonderland* とその日本語諸版 における擬音・擬態表現に関する英日語対照翻訳分析

澤 泰 人

〔抄 録〕

本稿では、ルイス・キャロル作 *Alice's Adventures in Wonderland* とその日本語版3編の翻訳分析を通して、英語では主に動詞や名詞で表わされていた音声や様態が、日本語では主に副詞として、多彩な擬音語や擬態語で表現されていることをまず確認した。次に、両言語において異なる表現形式で表わされる根拠を、認知言語学的枠組みから、言語表現者の事態認識の様式の相違に求めた。すなわち、英語においては、客観的事態把握にもとづいて分析的・客観的に事態を言語表現化するのに対して、日本語においては、主観的事態把握にもとづいて直接的・主観的に事態を言語表現化するという相違である。そして、この二種類の相異なる事態把握の様式について、従来指摘されている、事態認識者の視点の〈位置〉だけではなく、その位置の措定にいたるまでの〈移動〉、そして措定された視点の位置からの、当該事態の〈見えの範囲〉をも考慮に入れることによって、より包括的な説明を最終的に示した。

**キーワード** 事態認識、視点の位置、視点の移動、俯瞰モード、接写モード

## はじめに

日本語は、擬音語や擬態語が豊かであるといわれる。英語の物語文を原書とした日本語版でも、目にすることは多い。これらは、元々の英語ではどのような表現形式で表わされていたのだろうか<sup>(1)</sup>。本稿では、*Alice's Adventures in Wonderland* とその日本語版3編との英日語対照翻訳分析を行い、両言語の相違を観察する。そして、英語では動詞や名詞で表わされることの多いオノマトピアが、日本語では副詞として機能することが多く、その違いは、両言語における、言語表現者たる事態認識者の視点の〈移動〉・〈位置〉そして〈見えの範囲〉の相違に起因することを示す。

## 1. オノマトピア

本節では、本稿の考察の対象となるオノマトピアがいかなるものかを、先行諸研究を参照す

ることにより、定義しておく。尾野 (1984) によると、擬音語とは、人間の笑い声や動物の叫び声、あるいは物が壊れたり、打ち当たったりした時などに出る音など、生物や無生物の音響を写した言葉である。これに対して、擬態語とは、生物、無生物、自然の変化・現象・動き・成長などの状態・有様を描写的・象徴的に表現したものである。さらに寛・田守 (1993) では、擬音語は声性の有無によって〈擬声〉(声性あり：「アハハ」、「ワンワン」など)と〈擬音〉(声性なし：「ガタガタ」、「どんどん」など)に分類されれるとする。一方、擬態語は、まず心性の有無によって〈擬情〉と〈非擬情〉に分かれ、非擬情はさらに、有生性の有無によって〈擬容〉(有生性あり：「きょろきょろ」、「でれでれ」など)と〈擬態〉(有生性なし：「ひらひら」、「うねうね」など)に分類されれるとする。このうち、本稿は、擬音語の下位分類としての〈擬声〉・〈擬音〉と、擬態語の下位分類に置かれる〈非擬情〉としての〈擬容〉・〈擬態〉の4種を考察対象とするものである<sup>(2)</sup>。

## 2. 認知言語学とオノマトピア

本稿は、認知言語学の枠組みで、特に事態認識者の〈視点〉と言語表現の〈主観性〉の観点から、英語と日本語のオノマトピアについて、対照言語学的翻訳分析を施すものである。したがって、分析に入る前に、認知言語学の考え方が、オノマトピアの分析にどのように関わるのかを述べておかなければならない。本節では、まず2.1節で、認知言語学の中心概念をなす〈事態認識〉と〈視点〉の概念を整理する。次に、2.2節で、先行研究を参照しつつ、英語と日本語それぞれの言語表現者に一般的に通底していると考えられる事態認識の様式が対照的な相違を見せることを記述する。そして最後に2.3節で、英語と日本語におけるそうした事態認識の様式の差異が、両言語のオノマトピアの相違にもつながることを述べる。

### 2.1 事態認識と視点

認知言語学では、あらゆる言語表現には、それが表す事態を認識する主体(事態認識者)の主体的な解釈が反映されているとする。つまり、事態認識者は、自らが認識する事態を主体的に概念化(conceptualization)すると同時に、言語表現者として、それを言語表現化するというわけである。

事態認識には、概念化者たる言語表現者の〈視点〉が深く関わっている(Banfield 1982, 山梨 1995, 西村 2000)。事態認識者は、ある事態を認識する際には、ある立脚点に立ち、そこからその事態を認識している。そして、ラネカー(Langacker 1987, 1988)の規定によると、この概念化者である事態認識者が、事態を認識する際に定める立脚点と視線の向きを包括した概念が、〈視点〉(viewpoint)である<sup>(3)</sup>。この時、その立脚点、つまり視点の〈位置〉および視線の向き、つまり視点の〈方向〉は、自然に決まるものではない。事態認識者が当該の

事態を認識するにあたって、自らの主体的な認知操作として決定するものである。したがって、〈視点〉とそれにもとづく事態の概念化の結果として産出される言語表現は、程度の差こそあれ、すべて〈主観的〉なものであるといえる。

以上の観点にもとづくと、英語と日本語間の翻訳の前後において、同一の事態を表すのに異なる言語表現が採用されている場合には、事態認識者の、当該の事態に対する視点の置き方(位置)が異なっているといえる。その結果、英語と日本語それぞれの言語表現に反映されている事態認識者の、事態に対する解釈の主体性・主観性の程度も異なるといえる。

## 2.2 英語と日本語における事態認識者の視点と事態認識の様式

同一の事態であっても、事態認識者の事態認識の様式が違えば、異なる言語表現が産出される。そしてその事態認識の様式の違いは、事態認識者が当該の事態を認識する際に主体的に指定する視点の位置の違いであると、2.1節では論じた。認知言語学のこのような考え方と関連づける形で、本節では、英語と日本語の言語表現者に一般的に通底していると考えられる事態認識の様式には、対照的な相違が見られることを、先行研究に言及しつつ述べておく。

従来、英語は客観的表現を好む言語で、日本語は主観的表現を好む言語であるといわれてきた。これは、英語母語話者が事態を客観的に把握していく傾向があるのに対し、日本語母語話者が事態を主観的に把握していく傾向があるためである(Hinds 1986, 森田 1998, 池上 1981, 2003, 2004, Ikegami 2005, 金谷 2004, 菅沼 2002)。視点の位置との関連でいえば、池上(2003, 2004)や深田・仲本(2008: 173)の指摘にあるように、英語においては、事態の外に置かれた視点から、その事態を認識して言語表現化するのがより一般的であるのに対して、日本語においては、事態の中に視点を取り、それによって主体的・主観的に把握された事態を表現していく方が一般的なのである。

英語と日本語に関わる特徴としての以上のような指摘は、次のような事態認識に関する対照的な差異となってまとめられる<sup>(4)</sup>。

- (I) 主観的事態把握：言語表現者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする。実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、言語表現者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように〈自己投入〉し、主観的・体験的に事態把握をする。つまり、言語表現者の視点は当該の事態の中に位置している。
- (II) 客観的事態把握：言語表現者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする。実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、言語表現者は(自分の分身をその事態の中に残したまま)自らはその事態から抜け出し、事態の外に身を置いて、傍観者ないし観察者として観念的に〈自己分裂〉し、

自己をも含む事態を客観的に把握する。つまり、言語表現者の視点は当該の事態の外に位置している。

(cf. 池上 2003, 2004)

ただし、英語と日本語におけるこうした事態把握の違いからくる、〈客観的〉か〈主観的〉かといった言語表現の性質は、例外のない厳密な絶対的体系というよりも、むしろ相対的な傾向上のものであることは当然のことである。

### 2.3 事態認識とオノマトピアとの関わり：先行研究概括

これまでの議論を簡約して記述すれば、以下のような対立が見て取れよう。すなわち、視点を事態の外側に措定し、そこから事態を客観的に認識して言語表現化するのが英語である。これに対して、視点を事態の内部に置き、そこから事態を主観的に認識して言語表現化するのが日本語である。

本稿では、英語と日本語における、視点と主観性を中心的概念としたこうした事態認識の様式の差異が、両言語のオノマトピアの相違の要因となっていることを主張する。ここで、このような考え方の妥当性を支持するものとして、いくつかの先行研究を以下に挙げておく。

寛 (1993: 134, 143) は、擬音語や擬態語の起源に遡り、これらの語は本来、自然界に聞かれる音や物事の状態を模倣することから始まったものであるから、描写は現実の場面に近く具体的で、したがって直接性を持つものである。つまり現場に密着して、音的にも状态的にも、直接的な描写であると指摘している。これは、事態認識者が事態に密着して直接的な言語表現を産出するという事と同義であろう。

平子 (1999: 61) は、日本語における擬音語や擬態語は、自然のある部分を写し取っており、感性的リアリティが強く、たとえば「サラサラした紙」とか「ザラザラした紙」などと、紙の質感という、紙がその本来の属性として備えている客観的性質を擬態語という主観的感覚を表す語で表現しているという。そもそもこれらの擬態語は、事態認識者が事態の中に視点を置き、そこで直接に紙の質感を主体的に感じた自己の感覚をそのままに言語表現化したものである。この点で、擬態語は、日本語が主観的事態把握にもとづく主観的表現を好むという事実を示す証拠にほかならない。

小澤 (2006: 108) では、日本語の原典とその英語訳との対照分析がなされ、オノマトピアという日本語での感覚的表現が、英語では記述的・客観的表現に変わっているという指摘をしている。さらに、加賀野井 (2002: 171) は、オノマトピアが事態や風景を身体感覚的なものに変えてしまい、それが日本語を特徴づけるのだと説明している。これらは、日本語が主観的表現を好むのに対して、英語が客観的表現を好むという主張を例証するものと考えてよいだろう。

ベルク (1994)、Kita (1997)、Occhi (1999) は、そもそも擬音語や擬態語は事態に密着した言語表現形式であるという。さらに、深田・仲本 (前掲書: 191-192) では、これらの言語表現は、事態の中に入り込み、自らの身体、すなわち五感や身体感覚を介して直接捉えたその事態についての主体の解釈を表現している言語表現である。その点で、日本語の擬音語・擬態語は、事態を主体的に認識・解釈する主体の存在を顕在化している主体的・主観的な意味を表す言語表現であると指摘する。この時、主体の視点は当該の事態の中にあるわけで、翻訳において、日本語で擬音語や擬態語が出現した場合、もとの英語に比べて主体化・主観化が進んだ表現となっているといえる。また、小澤 (前掲書: 105) や寛 (前掲書: 134) の指摘にもあるように、そもそも英語よりも日本語の方が擬音語や擬態語の数が格段に多いわけだが、このこと自体が、日本語の方が主観的な表現を好む傾向にあることの証左であるといえる。

金谷 (前掲書: 36) は、こうした日本語のオノマトピアの豊かさに対して視点の〈位置〉の観点から比喩的に説明している。すなわち、日本語では事態に密着して置かれた〈虫の視点〉であるからこそ、様々な自然と生活の色、音、匂いが豊かに迫って来るのであり、日本人はそれをオノマトピアで、生き生きと、ありありと表現するのだという。

以上の先行研究を総括してみよう。まず、寛のいう「現場に密着した直接的表現」とは、認知言語学的にはどのように説明されるのか、なお検討が必要である。次に、平子、小澤および加賀野井の考察では、主観性の観点からの説明はあるものの、擬音・擬態語を言語表現として生み出すもとなる、事態認識者の視点、とりわけその〈位置〉に関する言及はない。逆に、金谷の説明では事態認識者の視点の〈位置〉には言及しているが、事態認識者の主観性については考慮していない。最後に、深田・仲本では、視点と主観性の概念を関連付けた説明を提示しているが、視点に関しては、その〈位置〉のみが考察の側面となっている。

これらに対して、本稿では、3.3節で述べるように、視点の〈位置〉だけでなく、その〈移動〉、さらには指定された視点位置からの〈見えの範囲〉までも明確にし、これらの概念と〈主観性〉の概念を有機的に結びつけることによって、日本語と英語のオノマトピアの相違に対して、より合理的かつ包括的な説明を付与することができることを示すものである。

### 3. 英日語対照翻訳分析

#### 3.1 データの抽出

ここでは、これまで述べてきたことを確認し、また、後の3.3節における本稿独自の考察のための材料を提供するために、翻訳を介した実際の英日語の物語文を見て、分析をしていくことにする<sup>(5)</sup>。扱う作品は、ルイス・キャロル作 *Alice's Adventures in Wonderland* とその日本語版3編である。本作品を選定した理由は、第一に、日本語版が数多く存在し、それら日本語版において多種多様のオノマトピアが見出されるということであり、また第二に、同一の原



文に対して、どのようなオノマトピアやその他の訳があてられているかを、日本語どうしで比較できるという、翻訳分析に適した側面を持つからである。なお、日本語のオノマトピアは、その音韻形態により多種多様なものがあるが、本稿では、同一の語基が二音節で反復したもの(「ごろごろ」、「にこにこ」など)に考察対象を絞ることにする。これは、田守(1993: 8)の言うように、二音節の反復形態が、日本語のオノマトピアの最も典型的な形態であり、数も多いからである。

まず、日本語において、擬音語の2種(擬声・擬音)と擬態語の2種(擬容・擬態)の下位分類別に、日本語版で出現したすべての二音節反復型の擬音・擬態語を抽出しておく。なお、同じオノマトピアであっても、カタカナとひらがなによる表記の違いが見受けられる場合があったが、特に区別はせず、ひらがな表記で統一してある。

## I. 擬音語

〈擬声〉うーうー、おいおい、がたがた、がやがや、ぎゃあぎゃあ、ぎゃーぎゃー、きいきい、きんきん、きんきん、くすくす、ごろごろ、しくしく、しゅっしゅっ、ぜいぜい、はあはあ、ひーひー、ひそひそ、ぶつぶつ、ぶうぶう、ぶーぶー、ぼそぼそ、もごもご

〈擬音〉かさかさ、がたがた、かちゃかちゃ、からから、がらがら、きいきい、きーきー、ごとごと、さやさや、じゃぶじゃぶ、ちゃぶちゃぶ、ちゃらちゃら、とんとん、どんどん、ばしゃばしゃ、ばしゃばしゃ、ぱたぱた、ぱらぱら、ぱりぱり、びしゃびしゃ

## II. 擬態語

〈擬容〉いきいき、いそいそ、うずうず、うとうと、おずおず、おどおど、がくがく、がたがた、ぎゅうぎゅう、きよときよと、きよろきよろ、ぐいぐい、ぐずぐず、くたくた、ぐらぐら、くるくる、ぐるぐる、ぐんぐん、ごそごそ、しげしげ、じろじろ、ずけずけ、すたすた、すらすら、ずるずる、ずんずん、せかせか、そろそろ、ぞろぞろ、そわそわ、たらたら、ちびちび、ちょこちょこ、つんつん、とことこ、とぼとぼ、どんどん、にこにこ、にたにた、にやにや、によろよろ、ぱたぱた、ぱたぱた、ぱちぱち、ぱらぱら、ぴくぴく、ひょこひょこ、ぴんぴん、ぶるぶる、ぺこぺこ、へとへと、ぼやぼや、まざまざ、まじまじ、ますます、むちゃむちゃ、めそめそ、めちゃめちゃ、もじもじ、もそもそ、もぞもぞ、もたもた、らくらく、わざわざ

〈擬態〉おどおど、ぎゅうぎゅう、きらきら、くねくね、くりくり、ぐりぐり、ごちゃごちゃ、さらさら、しょぼしょぼ、そよそよ、ちゃらちゃら、つるつる、どぼどぼ、ながなが、ぱたぱた、はらはら、ぱらぱら、ぱりぱり、ぴかぴか、びしょびしょ、ひらひら、

ぶかぶか、ふさふさ、ふわふわ、ぽたぽた、むんむん、もんもん

次に、翻訳者別で、使用されたオノマトピアの数は以下ようになった。

表1 翻訳者別によるオノマトピアの使用数

	擬声	擬音	擬容	擬態	合計
高橋	20(21.7%)	12(13.0%)	46(50.0%)	14(15.2%)	92
高山	14(12.3%)	13(11.4%)	68(59.6%)	19(16.7%)	114
柳瀬	22(13.8%)	15(9.4%)	89(56.0%)	33(20.8%)	159

これを見ると、高橋訳・高山訳・柳瀬訳の順にオノマトピアの使用数が多くなり、特に柳瀬訳では高橋訳の約1.7倍の数にのぼるオノマトピアが見出された。日本語のオノマトピアは主観的事態把握にもとづく主観的表現であるから、この点に限っていうと、これらの日本語版3編を相対比較した場合、柳瀬訳が最も主観性が高いということになる。

次に、上に抽出した日本語のオノマトピアが、英語ではどのように表わされていたかを表現形式別に分類すると、以下の(a)～(g)のようになった。なお、擬音語の(a),(b)においては、日本語と同じようにその語自体に擬音性または擬声性があるか、あるいは無いかによってさらに小分類できたが、表現形式そのものは同じである。また、動詞のing形には、動名詞や現在分詞としての用法の他、冠詞が付くなど、品詞的にはむしろ名詞として機能しているものも含めた。以下、必要最小限の例を、高橋による翻訳から挙げておく（各文末数字は頁数を表す）。

(a) 動詞（とそのing形）

- (1) ちょうどそのとき、少しむこうのほうで、池の水をパシャパシャやっている音が聞こえたので、…… [36]

Just then she heard something splashing about in the pool a little way off,... [26]  
 〈擬音性有り〉

- (2) しばらくすると、遠くから小さな足音がぱたぱたと聞こえてきたので、…… [28]

After a time she heard a little pattering of feet in the distance... [21]  
 〈擬音性有り〉

- (3) アリスはそれが自分をさがしにきたウサギだとわかったので、思わずふるえあがりしました。すると家もガタガタゆれました。[61]

Alice knew it was the Rabbit coming to look for her, and she trembled till she shook the house,... [45] 〈擬音性無し〉

(b) 名詞

- (4) すると子イヌは、喜んでキャンキャンなきながら空中にとびあがり、…… [69]

…whereupon the puppy jumped into the air off all its feet at once, with a yelp of delight, … [53] <擬声性有り>

(c) 副詞

- (6) ……そしてもそもそと前足をのばしてアリスにさわろうとしているのです。 [52]

…, and feebly stretching out one paw, trying to touch her. [51]

(d) 形容詞

- (6) なんとかしてテーブルの足をよじ登ろうとがんばりましたが、ツルツルすべるばかり。 [22]

…she tried her best to climb up one of the legs of the table, but it was too slippery; [17]

(e) 動詞 (とその ing 形) + 副詞 (句)

- (7) しかもぐんぐん小さくなっていく最中ではありませんか。 [34]

…, and was going on shrinking rapidly; [25]

(f) 前置詞句

- (8) というのは、このちびちゃんは奇妙な形をしていて、そのうえ手足をめちゃめちゃに動かすのです。 [101]

…as it was a queer-shaped little creature, and held out its arms and legs in all directions, … [78]

(g) 対応表現なし：日本語のオノマトピアに対して原典の英語で対応する表現が全くない場合

- (9) それからくるくる体の大きさがかわるんです！ [76]

—and I don't keep the same size for ten minutes together! [58]

以上の表現形式の分布を、日本語のオノマトピアの4種の下位分類および翻訳者別にまとめたところ、以下ようになった。



## I. 擬音語

〈擬声〉

表2 翻訳者別による〈擬声〉の出現数

	高橋	高山	柳瀬
a-1. 動詞 (とその ing 形) 〈擬声性+〉	14	13	12
a-2. 動詞 (とその ing 形) 〈擬声性-〉	0	0	1
b-1. 名詞 〈擬声性+〉	1	1	2
b-2. 名詞 〈擬声性-〉	2	0	1
c. 副詞	0	0	2
d. 動詞 (とその ing 形) + 副詞	0	0	0
e. 形容詞	0	1	1
f. 前置詞句	1	0	2
g. 対応表現なし	2	0	1
合計	20	15	22

注：b1～d および e の副詞は、それぞれを修飾する語句を含む場合もある。以降同じ。

〈擬音〉

表3 翻訳者別による〈擬音〉の出現数

	高橋	高山	柳瀬
a-1. 動詞 (とその ing 形) 〈擬音性+〉	9	10	9
a-2. 動詞 (とその ing 形) 〈擬音性-〉	1	1	4
b-1. 名詞 〈擬音性+〉	1	2	1
b-2. 名詞 〈擬音性-〉	0	0	0
c. 副詞	0	0	0
d. 動詞 (とその ing 形) + 副詞	0	0	0
e. 形容詞	1	0	0
f. 前置詞句	0	0	0
g. 対応表現なし	0	0	1
合計	12	13	15

## II. 擬態語

〈擬容〉

表4 翻訳者別による〈擬容〉の出現数

	高橋	高山	柳瀬
a. 動詞 (とその ing 形)	14	18	21
b. 名詞	6	8	10
c. 副詞	13	16	23
d. 動詞 (とその ing 形) + 副詞	3	6	6
e. 形容詞	4	8	11
f. 前置詞句	2	6	8
g. 対応表現なし	4	5	10
合計	46	67	89

〈擬態〉

表5 翻訳者別による〈擬態〉の出現数

	高橋	高山	柳瀬
a. 動詞 (とその ing 形)	10	7	12
b. 名詞	1	1	1
c. 副詞	0	0	3
d. 動詞 (とその ing 形) + 副詞	0	0	0
e. 形容詞	3	8	11
f. 前置詞句	0	0	1
g. 対応表現なし	0	3	5
合計	14	19	33

### 3.2 分析と考察

ここでは、まず3.1節でまとめたデータ結果について、擬音語と擬態語のそれぞれにおいて分析を施し、英語と日本語におけるオノマトピアの相違はどのような点に集約されるかを述べておくことにする。

#### 3.2.1 擬音語

小澤（前掲書：105）は、一般に、日本語では、英語をはじめとする他の言語と比べて、擬音語・擬態語の使用頻度が高いので、たとえば日本語の原典と英語版を比べた場合、日本語で擬音語や擬態語で表されていたものが、英語では動詞表現（動詞＋副詞等）を中心に表現されることになる旨を指摘している。しかし、これは英語において擬音表現が少ないということの意味しない。むしろ、日本語同様、英語にも多くの擬音表現がある。現に、表2や表3に見られるように、日本語のほとんどの擬音語に対して、擬声性や擬音性を有する英語表現が対応している。〈擬声〉では、高橋訳が全20例中15例（75.0%）、高山訳が全15例中14例（93.3%）、柳瀬訳が全22例中14例（63.6%）となっているし、〈擬音〉でも、高橋訳が全12例中10例（83.3%）、高山訳が全13例中12例（92.3%）、柳瀬訳が全15例中10例（66.7%）と、高い割合で対応関係を見せている。つまり、擬音表現に関して言えば、英語でも豊富に存在しているわけである。

もっとも、表2と表3の結果から明らかなように、英語における擬音表現の形式は、そのほとんどが動詞によって、その他いくつかは名詞によって担われていることが、日本語とは決定的に異なる点である。田守（前掲書：18）の指摘にあるように、日本語オノマトピアは普通、典型的に副詞として機能する。そしてこのことこそが、擬声性や擬音性を有するオノマトピアが用いられている場合であっても、英語と比べて日本語の方が実際の音声をより直接的に、リアルに模写したものであるといえる根拠となるだろう。なぜならば、上に見たように、英語では、動詞や名詞の語彙構造そのものが実際の音声を模写しているが、これらの品詞は、動詞であれば人称や時制、名詞であれば数などによって語形変化する。そしてその場合、元々の音声を模写していた語感は当然に低減してしまう。これに対して、日本語のオノマトピアは、それ自体は語形変化を起こすことはなく、直接に副詞として機能するから、実際の音声の模写性の程度は損なわれることはないからである。

このような、英語と日本語における、実際の音声を模写する直接性の相違は、そのまま事態認識者による事態認識の際の視点と主観性の程度の差異に起因すると本稿では考える。この点については、後の3.3節で議論する。

#### 3.2.2 擬態語

擬音語の場合と異なり、日本語の擬態語は英語と比べて種類も多く、多彩である。たとえば「笑う」という場合、英語では“giggle”、“snicker”、“sneer”、“grin”などと、それぞれ別々

の動詞という形式で表現する。この場合、擬態の表わす意味、すなわち様態そのものは動詞という表現形式に内包されており、擬態語として独立した表現形式としては存在しない。これに対し、日本語では「くすくす笑う」「ひそひそ笑う」「へらへら笑う」「にやにや笑う」というように、擬態語は動詞を修飾する副詞として独立して機能しており、それを動詞に連結することによって表現を完成させる。つまり、副詞としての文法的機能を独立して持ちうるからこそ、日本語においては英語に比して擬態語がはるかに多く、多彩であると考えられるのである。

この点からすると、表4や表5において、英語では動詞で表現されていたものが、日本語においては擬態語として表わされているパターンが、相対的に多いことは当然の結果であろう。〈擬容〉では、高橋訳が全46例中14例 (30.4%)、高山訳が全67例中18例 (26.9%)、柳瀬訳が全89例中21例 (23.6%)となっているし、〈擬態〉でも、高橋訳が全14例中10例 (71.4%)、高山訳が全19例中7例 (36.8%)、柳瀬訳が全33例中12例 (36.4%)であり、このうちほぼすべてが、a～gの表現形式の中で最も高い割合となっている。

また、日本語の擬態語に対応する表現が英語において全く見られなかった場合も数例見られた (高橋訳4例、高山訳8例、柳瀬訳15例)。これもまた、英語よりも日本語の方が擬態語が豊富であることの傍証となろう。

いずれにせよ、擬態語の場合も、擬音語の場合と同じく、その意味するところ、つまり様態は、英語では動詞や名詞という表現形式に内包されていることが多いのに対して、日本語では、独立した副詞として機能し、動詞を修飾するという形式をとっているのである<sup>(6)</sup>。そうすると、英語と比べて日本語の方が、オノマトピアが表わす実際の様態をより直接的に、リアルに模写したものであるといえる。なぜならば、英語では、実際の様態が動詞や名詞の語彙構造そのものに内包されてしまった結果、もはや様態のリアルさが直接に感じられなくなってしまうのに対し、日本語のオノマトピアは、それ自体は語形変化せず、直接に副詞として機能するから、実際の様態の模写性の程度はそのままに感じられるからである。このような英語と日本語における、実際の様態を模写する直接性・リアル性の相違は、擬音語の場合と同様、そのまま事態認識者が事態を認識する際の視点と主観性の程度の差異に起因すると本稿では考える。この点についても、次の3.3節で議論する。

### 3.3 本稿の主張

本節では、3.2節の分析と考察から提起された、英語と日本語のオノマトピアの相違について、2.3節で挙げた先行研究を包括発展させた、本稿独自の主張を述べ、認知言語学的観点から合理的説明を付与することにする。

3.2節で見たように、英語では主として動詞や名詞に内包される形でオノマトピアの意味が表わされる一方、日本語では主として副詞としてオノマトピアが独立し、動詞を修飾するという形をとるという表現形式上の相違が見られる。そしてそれは、英語と日本語において、オノ

マトピアが模写する実際の音声や様態の直接性・リアル性の相違につながっている。ここでは、英語よりも日本語の方が直接性・リアル性が高いという事実に対して、認知言語学的に説明が可能であるということを示す。

まず特に注目するのは、言語表現者たる事態認識者が、言語表現化の前提として事態を認識する際に主体的に指定する視点の〈位置〉、および産出される言語表現の〈主観性〉である。すでに述べたように、事態認識者は、自らが主体的に指定した視点位置から、事態を認識し、概念化し、最終的に言語表現を産出するわけである。したがって、こうした事態認識者の主体的な認知プロセスを経て産出される言語表現は、オノマトピアも含めて、すべて〈主観性〉を帯びたものであるといえる。そして、2.2節で挙げた先行研究によれば、英語と日本語では、〈客観的事態把握〉に対して〈主観的事態把握〉で視点の位置が異なるから、同一の事態であっても、前者では客観的言語表現として、後者では主観的言語表現として産出されるのであった。つまり、相対的に、英語は主観性が低い言語表現が、一方日本語は主観性が高い言語表現が産出される傾向にあるというものであった。

これをオノマトピアにあてはめてみよう。3.2節で見たように、英語では主として動詞や名詞によって表現されていた事態が、日本語では副詞としてそれぞれ擬音語や擬態語となって表現されている。2.3節の算の指摘にもあったように、日本語のオノマトピアは本来、自然界に聞かれる音や物事の状態を模倣することから始まったものであるから、現場に密着して、音的にも状態的にも、直接的な描写である。そのことから考えると、日本語では、事態認識者の視点が事態内部に入り込み事態に密着する、つまり事態内部に視点の〈位置〉を指定することによって、事態を直接的に捉えた結果、オノマトピアが言語表現として産出されていると考えられる。ゆえに、擬音語にせよ擬態語にせよ、認識した音声や様態そのままに言語表現化され、それが直接に副詞としても用いられることになる。事態認識者が主体的に当該の事態内部に視点の位置を指定し、そこから直接に感じたままをリアルに言語表現化している点で、相対的に主観性の高い言語表現であるといえる。

これに対して、英語では、時制や格や人称による語形変化を伴う動詞や名詞で表現されること自体が、擬音表現にせよ擬態表現にせよ、実際に模写した音声や様態が、日本語のようにそのまま直接的に言語表現化されるのではないということを示している。特に擬態表現では、動詞の語彙構造に様態が取り込まれ、実際の様態が模写されたそのままに言語表現化されている面影は、もはやない。このことから考えると、日本語とは違って、英語では少なくとも、事態認識者が事態の内部に視点を置いて、当該の事態における音声や様態をありのまま直接的に捉えているとはいえないであろう。むしろ、事態外部に置いた視点から、それらをあくまで客体的な事態の一部として分析的に捉えていると考えられる。そうであるからこそ、認識された音声や様態が、そのままの模写という形ではなく、動詞や名詞といった語彙形式に変換されているのである。この点において、英語では、日本語と比べると客観性が高い、言い換えれば主観

性の低い言語表現であるといえよう。

以上見てきた英語と日本語のオノマトピアの違いは、認知言語学的には、結局は事態認識者が主体的に指定する視点の〈位置〉の違いに起因するということになる。そしてそれは、両言語のオノマトピアの〈主観性〉の程度の相違にもつながるわけである。しかしながら、視点位置の指定に関連して、さらに考えるべきことがある。それは、視点の位置を指定する前に存在すると考えられる視点の〈移動〉と、指定された視点位置からの事態の〈見えの範囲〉である。

まず、視点の〈移動〉について述べる。本稿で考察しているオノマトピアに関して言えば、英語では事態認識者の視点の位置が事態の外側に置かれるのに対し、日本語では内側に置かれることになる。すでに2.1節で述べたように、こうした視点の位置指定というのは、事態認識者が事態を概念化する際に経る認知プロセスである。ここで、本来、〈視点〉というものが人間の身体感覚、とりわけ視覚に根ざした概念であることを考慮すれば、ある事態認識において、その〈位置〉をどこに指定するかという主体的な認知操作には、視点の原点たる概念化者から最終的に指定される〈位置〉までの視点の〈移動〉という認知操作が伴っているはずである<sup>(7)</sup>。つまり、最終的な視点位置の指定に至るまでに、英語では事態の外部へと視点を引き離すという、いわば〈離遠移動〉があり、日本語では事態の内部へ視点を近づけていくという、いわば〈接近移動〉が、事態認識者が事態を概念化する際の主体的な認知プロセスとして存在すると考えられるのである。

次に、視点の位置による〈見えの範囲〉について述べる。視点の移動の結果として、視点の位置が英語と日本語で異なるのであるから、それに伴い、その視点位置からの事態〈見えの範囲〉が異なってくるのは当然であろう。英語では、〈離遠移動〉によって事態の外側に指定された視点から認識された事態は、全体を眺めるような形で、いわば〈俯瞰モード〉で捉えられていることになる。だから、客観的には事態の一部に過ぎない、当該事態内の音声や様態は、そのまま直接的に捉えられて独立した擬音語や擬態語として言語表現化されることはない。ただ分析的に捉えられて、動詞や名詞などの語彙形式に内包されるのみである。逆に日本語では、〈接近移動〉によって視点は事態の内側に指定されてしまったがゆえに、事態の全体が認識されることはない。ただ目の前の事態を、直接的に、いわば〈接写モード〉で捉えることになるのだ。それゆえ、当該事態内の音声や様態は、そのまま直接的に捉えられて独立した擬音語や擬態語として言語表現化されることになる。森田(2006: 196)は、日本語の物語文においては、ある事態を認識して言語表現化するのに、傍観者の目で全体の地理的状况を俯瞰するのではなく、あくまで内側のその領域に己の視点を据えてとらえる場合があり、ここに日本語的な発想の特殊性が見て取れると指摘する。これは、〈俯瞰モード〉の英語に対して、〈接写モード〉の日本語という対照的相違を主張する本稿の論考と、軌を一にするものである。

以上の議論を簡約して記述すれば、以下のような対立が見て取れよう。すなわち、視点を事態から離して(〈離遠移動〉)その外側に指定し、そこから全体的に〈俯瞰モード〉で事態を客



観的に認識して言語表現化するのが英語である。これに対して、視点を事態に接近させて(〈接近移動〉)その内部に置き、そこから直接的に〈接写モード〉で事態を主観的に認識して言語表現化するのが日本語である。これらは、カメラにたとえるとさらにわかりやすいだろう。英語ではレンズ(視点)をズームアウト(離遠移動)させて被写体(事態)の全体像を写し(俯瞰モード)、日本語ではレンズをズームイン(接近移動)させて被写体の近くから直接的に写す(接写モード)のである。こうした視点の〈移動〉・〈位置〉そして〈見えの範囲〉の相違が、英語と日本語におけるオノマトピアの表現形式の相違につながっているといえる。

### おわりに

本稿では、翻訳を介した英語と日本語それぞれの物語文において、オノマトピアの使用の観点において、翻訳前後の両言語において相違が見られることを示し、そしてそれが英語と日本語における事態認識の様式の差異に起因することを確認した。その際、認知言語学的観点から、事態認識者の視点の〈移動〉・〈位置〉そして〈見えの範囲〉を考慮に入れて、英語と日本語の相違に対する包括的かつ合理的な説明の付与を試みた。

日本語は、事態をそのままに、擬音・擬態語化してとらえようとする。そして、事態の内側に入り込んだ視点であるがゆえに、事態の全体像は見えず、その視点の範囲は〈接写的〉になる(〈接写モード〉)。森の中に入って、目の前の木を見るようなものだ。オノマトピアも、事態内部で認識した、事態の一部である音声や様態を、そのまま直接的に模写した主観性の高い言語表現となる。だから、模写された音声や様態は、くずされることなく、そのまま副詞として機能する。これに対して、英語は森の外側から森全体を〈俯瞰的〉な視点範囲でもって眺める(〈俯瞰モード〉)。だから、事態をそのまま直接描写せず、事態からその身を引いて、事態の外側に置いた視点から、客観的・全体的に分析して言語表現化するのである。オノマトピアも例外ではなく、動詞や名詞として語彙化されたものには、もはや日本語ほどの直接性・リアル性はない。木は全体像として俯瞰された森の一部に過ぎないのである。

#### 〔注〕

- (1) 日本語で擬音語や擬態語であるものが、英語においても必ずしも同じように〈語〉という単位で表わされているわけでは、もちろんない。2語以上から成る動詞句などで表わされている場合もある。本稿では、日本語・英語を問わず、〈語〉だけでなく、このような〈句〉も含めた、擬音と擬態に関する表現全般のことを、「オノマトピア」と総称して用いることにする。
- (2) なお、同書では、さらに〈擬情〉を表層性の有無によって〈感覚〉(表層性あり：「ひりひり」、「ちくちく」など)と〈感情〉(表層性なし：「いらいら」、「るんるん」など)に分類している。ただし、擬情は、物語文においては登場人物が自らの感覚あるいは心情・心理として



〈主観的〉に感じたことを模した表現である。これに対して、本稿では、物語文中に展開する〈客体的〉な事態の一部が言語表現化される場合、つまり擬音語（擬声・擬音）と擬態語（擬容・擬態）を考察対象とするものである。その意味で、擬情は別のものとして、本稿では扱わないこととする。

- (3) なお、この点に関して、靱山・深田 (2003: 108) は、〈視点〉とは、ものを見るとき位置を指すだけでなく、ある事物をどの程度主体的／客体的に解釈しているかということをも包括する概念であると述べている。この指摘は、言語表現者の〈視点〉と言語表現の〈主観性〉が、不可分の関係にあることを示唆するものである。
- (4) ここに挙げる事態把握の二種については、Langacker (1985, 1990) では〈オン・ステージ〉と〈オフ・ステージ〉、中村 (2004) では〈I モード〉と〈D モード〉として、同様の説明を与えている。
- (5) 英語と日本語のオノマトピアのデータ抽出にあたっては、松田 (2007)、尾野 (1984)、小野 (2007) の各辞典を参考にした。
- (6) 〈擬容〉に関しては、英語でも、日本語と同様に副詞で表わされている場合が比較的多い（高橋訳13例・28.3%、高山訳16例・23.9%、柳瀬訳23例・25.8%）。しかし、表現形式は副詞として同じでも、英語では、動詞の場合と同じように、事態の中の実際の様態をそのまま模写して直接的に表わしたものではなく、副詞という語彙形式に内包しているところが、日本語とは異なる点である（たとえば、“feebly” に対して「もそもそ」など）。
- (7) 事態認識者の視点の〈位置〉の措定には、視点の〈移動〉が必然的に伴う。上野 (1985: 13) では、（ある位置に）固定された視点は、あくまで移動しつつある視点の途上に存在している、あるいは、必要ならば視点を動かせる状態ということであると指摘している。

#### 〔参考文献〕

- Banfield, A. (1982) *Unspeakable Sentences: Narration and Representation in the Language of Fiction*. Boston: Routledge & Kegan Paul.
- ベルク, オギュスタン (1994) 『空間の日本文化』(宮原信訳, ちくま学芸文庫) 筑摩書房.
- 深田智・仲本康一郎 (2008) 『概念化と意味の世界』研究社.
- Hinds, J. (1986) *Situation vs. Person Focus*. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- 平子義雄 (1999) 『翻訳の原理』大修館書店.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- 池上嘉彦 (2003) 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標 (1)」, 山梨ほか (2003: 1-49).
- 池上嘉彦 (2004) 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標 (2)」, 山梨ほか (2004: 1-60).
- Ikegami, Y. (2005) “Indices of a ‘Subjectivity-prominent’ Language: Between Cognitive Lin-

- guistics and Linguistic Typology.” *Annual Review of Cognitive Linguistics* 3, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 132-164.
- 加賀野井秀一 (2002) 『日本語は進化する』日本放送出版協会。
- 寛壽雄 (1993) 「文学作品に見られるオノマトペ表現の日英対照」, 寛・田守 (1993: 127-144)。
- 寛壽雄・田守育啓 (編) (1993) 『オノマトピア 擬音・擬態語の楽園』勁草書房。
- 金谷武洋 (2004) 『英語にも主語はなかった』講談社。
- Kita, S (1997) “Two-dimensional semantic analysis of Japanese mimetics,” *Linguistics* 35, 379-415.
- 小澤悦夫 (2006) 「日英語比較の一視点—日本文学の英訳を中心に—」, 『文化論集』28, 89-135.
- Langacker, R. W. (1985) “Observations and Speculations on Subjectivity,” *Iconicity in Syntax*, ed. by John Haiman, Amsterdam: John Benjamins, 109-150.
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 1. *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1988) “A Usage-based Model,” *Topics in Cognitive Linguistics*, ed. by Brygida Rudzka-Ostyn, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 127-161.
- Langacker, R. W. (1990) “Subjectification,” *Cognitive Linguistics* 1, 5-38.
- 松田徳一郎 (監)・リーダーズ英和辞典編集部 (編) 『英語擬音語辞典』研究社。
- 松本曜 (編) (2003) 『認知意味論』大修館書店。
- 宮崎清孝・上野直樹 (2008) 『視点』東京大学出版会。
- 籾山洋介・深田智 (2003) 「意味の拡張」, 松本 (2003: 73-134)。
- 森田良行 (1998) 『日本人の発想、日本語の表現』中央公論社。
- 森田良行 (2006) 『話者の視点がつくる日本語』ひつじ書房。
- 中村芳久 (2004) 「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」, 中村 (2004: 3-51)。
- 中村芳久 (編) (2004) 『認知文法論II』大修館書店。
- 西村義樹 (2000) 「対照研究への認知言語学的アプローチ」, 坂原 (2000: 145-166)。
- Occhi, D.J. (1999) “Sounds of the heart and mind: Mimetics of emotional states in Japanese,” *Languages of sentiment*, ed. by Gary B. Palmer and Debra J. Occhi, John Benjamins, 151-170.
- 小野正弘 (編) (2007) 『日本語オノマトペ辞典』小学館。
- 尾野修一 (1984) 『日英擬音・擬態語活用辞典』北星堂書店。
- 坂原茂 (編) (2000) 『認知言語学の発展』ひつじ書房。
- 菅沼文子 (2002) 「童話における視点の動きの日英語対照研究」, 『JELS』19, 107-115.
- 田守育啓 (1993) 「日本語オノマトペの音韻形態」, 寛・田守 (1993: 1-15)。
- 上野直樹 (1985) 「視点のしくみ」, 宮崎・上野 (2008: 1-99)。
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』ひつじ書房。

山梨正明ほか(編)(2003)『認知言語学論考 No. 3』ひつじ書房.

山梨正明ほか(編)(2004)『認知言語学論考 No. 4』ひつじ書房.

〔言語資料〕

Carroll, L. (1988) *Alice's Adventures in Wonderland*. Kodansha International.

柳瀬尚紀(訳)(1987)『不思議の国のアリス』筑摩書房.

高橋康也・高橋迪(訳)(1988)『不思議の国のアリス』河出文庫.

高山宏(訳)(1994)『新注 不思議の国のアリス』東京図書.

(さわ やすと 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

(指導: 橘高 真一郎 教授)

2009年9月28日受理